

---

# 政権交代（？）に巻き込まれた魔法の鏡の話

叫び人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

政権交代（？）に巻き込まれた魔法の鏡の話

### 【Nコード】

N5097Q

### 【作者名】

叫び人

### 【あらすじ】

テンションがおかしい魔法の鏡と口調が男前のお城の兵士さんによる、しらゆきひめのその後の話。

## 宣告（前書き）

童話は童話でも童話パロです。苦手な方ご注意ください。

## 宣告

かあさん、おれ、クビになりました。

「クビじゃねえよ。その前にかあさんって誰」

「おれ創った人。何世紀前の人だったっけな」

ふーん、とさらつと常識的に（というか人間的に）考えておかし  
いセリフを流された。こいつとはいい酒飲めそう。でもちよつとさ  
びしいかな！

「知らねえよ」

「知つてよ！おれつてば最近ドキツイおばさんとか喋ってなかつ  
たもんだからさびしくつてさびしくつて！」

「知らねえって。だいたいお前酒飲めねえだろ」

「まあね！」

あたしくやしい！と声だけで訴えかけるが、男——お城の兵士は  
はいはいとあしらいながら改めて口を開いた。

「確認のためにもう一度繰り返します。魔法の鏡殿。貴殿は魔女の  
陰謀に手を貸した罪により城外追放の刑に処されました。よってこ  
れより然るべき場所へとお送りいたします」

返事は、と催促され、テンションもそのままに了解いたしました  
とも！と叫んだ。

半ば以上ヤケだったが、だれにも責められまい。  
だってこれ、ヘタしたら処分<sup>しけい</sup>宣告じゃん！？



## 宣告（後書き）

魔法の鏡の憂鬱

（おれどうなの！？）

というお話でした。サブタイトル迷いましたが、結局初出のままにしました。

読んでくださってありがとうございました。

## 荷馬車にゆられて？（前書き）

童話は童話でも童話パロです。苦手な方ご注意ください。

## 荷馬車にゆられて？

まあ、と兵士さんが軽く口を開いた。ほぼ同時に遠くから昼を告げる城の鐘が聞こえる。ああ、遠い存在になったなあ、城の鐘。そんな風に黄昏ている現在の居場所が荷馬車の中です。はろー。ちなみに現在地はわかんないよなにしろ布巻かれてるからね！

「恩赦がきくから大丈夫だろ」

「恩赦あ？」

思わず素っ頓狂な声が出る。なにそれ、あのオバハン妊娠してたっけ？

「……お前、知らないのか？」

「なにが」

「女王陛下は、」

兵士さんはそこで言葉を切ったけど、さすがに察した。まあ、お姫様を狙ったんだからねえ。というか女王陛下って言うていいのか。まあどうでもいいけど。

「知るわけないじゃん。ずっとあの部屋にいたのにさ」

「魔法具なのにか」

……えーと？ ……ああ。

「『魔法』の『道具』だから魔法具だよ。魔法そのものじゃないし、道具なんだから自由に動けるわけないじゃん。んもう、兵士さんっ

たらか・ん・ち・が・い」

「今しゃべってるだろ」

「スルーか。ま、そりゃおれってば高位レベルの魔法具だから？  
このぐらいいはね。でもやっぱり色々制約があつて自由じゃないし」

知能や思考能力、自我があるような魔法具は稀であると同時に危険だ。普通の道具は使う人次第だから取扱説明書をつけるだけでいいが、自分の意思がある道具ではそうもいかない。なので魔法その他が強力なものも含めて、生まれながらにきつつい制約に縛られるのだ。

「というわけで、誰かが使ってくれなきゃおれはただの喋る鏡なのです。めでたしめでたし」

「めでたいのか、それは」

「さあね。おれは悪くないと思うけど」

使ってもらえなくなったらおしまいだし。危険物とかいって壊されたらそれこそ終わりだ。現在進行形でそうなっちゃってるけど。うーむ。

「人の親はさあ、子供を躾けるだろ？ それとおんなじ。兵士さんは人間だからよくわかんないだろうけど、これも親の愛の一つだよ」

むかし、むかし。自我と容れ物と魔法と一緒にもらった、

「『大切にしてもらえように』ってさ」

おれは、その言葉こそが大切だったけど。



## 荷馬車にゆられて？（後書き）

道具として

魔法の鏡はマザコン説。でした。  
読んでくださってありがとうございます。

## 荷馬車にゆられて？（前書き）

童話は童話でも童話パロです。苦手な方ご注意ください。

荷馬車にゆられて？

「……まあそれはいいや。で、結局恩赦ってなんで？」

「姫様が隣国の王子と結婚したんだ」

「へえー！」

命狙われてたのにすごいねえ、と素直な感想を漏らすと兵士さんがすごく複雑そうな雰囲気になった。うん、不謹慎だったかなごめんなさい。思い返せばこのお城って王様が亡くなってからはあのオバハンとお姫様のものだったし、つまりはお城の兵士が守るのはあの二人だったってことで、まあ、うん、やっぱり不謹慎だったね！

「……聞かなかったことにしてやる」

「あはは、どうもー。あとついでに匿名でお姫様に「結婚おめつとー」って言つといてもらえる？」

「……………」

……おや？てつきり「言えるか阿呆」とか突っ込まれるのかと思っただけ。それとも匿名ならおっけー？

「……姫様が、」

「ん？」

「この追放は、姫様が取り計られたものだ」

そう言われても、思ったのは「へえ」ぐらいである。いや、一応驚いたけど。お姫様が直接手を下すつて。でもまあ、お姫様の命狙ったんだし、仕返しされてもまあ、納得するしかないんじゃないかね？  
というか恩赦がきいたつてことは実は壊される予定だったのかなも

しかしなくとも。こわっ！お姫様さりげなくこわっ！おれ正直密偵してた時に手に入れた情報ぐらいしかお姫様のこと知らなかったけど（だって魔女部屋から動けないし）、実は継母並みに容赦ない子だったのか？女王？女王様ですか？なにそれこわい。

と、まあつらつら考えていたので、一瞬兵士さんのセリフを聞き逃しそうになった。

「「また会える日を楽しみにしています」だよ」

「……ん？」

聞いても意味わかんなかったけどな！

荷馬車にゆられて？（後書き）

（すみません、わんもわぶりーずで）

あれー…お姫様出す予定まったくなかったのに……あれ？  
読んでくださってありがとうございます。

## 荷馬車に揺られて？（前書き）

童話は童話でも童話パロです。苦手な方ご注意ください。

## 荷馬車に揺られて？

雨の降る日のことだった。降るといふより叩きつけるという表現が正しくて、遠近関係なく雷鳴がとどろく。加えて今は真夜中というその時刻、明かりのついていない城の廊下は水槽の中にどろどろの黒いインクを満たして、その中に足を踏み入れたように真っ暗で、踏み出したら最後、食われそうな気さえする。雷鳴が響く。一瞬窓の向こうで世界がまばゆく照らし出されて、廊下にある鏡がピカリと光り、それが一層暗闇を深くした。雨音に閉じ込められている気分だ。恐ろしい、なんて言葉じゃ足りない。

「だれか、いないの……？」

震える唇から辛うじて紡ぎだされた言葉は、ほとんど涙声だった。その小さな声は思いのほかはつきりと響いて、最終的に、途方もなく廊下が長く、暗闇が深く、誰も傍にいないことを証明しただけだった。唯一少女を照らす手元の小さな明かりも、今では闇の深さを助長するものでしかなくて、けれど手放すなんてありえない。風の音がまるで怪物のうめき声のように聞こえて、その声が耳に届くたびに肩がはねる。恐ろしい。早く部屋に帰りたい。でももう、ここがどこかわからない。足が震える。動けない。怖い、泣きそう。

だれか、たすけて――

そんな時だった。

『誰かいるの?』

廊下の鏡が、優しく喋りかけてくれたのは――。

\*\*\*

「つてな感じでFA?」

「んなわけねえだろ」

ばっさり切られました。えー、良いお話だと思ったんだけど。

「……魔法の鏡にも妄想癖があるんだな」

「ひつどーい。差別的発言ですよっ!もっ!かがみん怒っちゃうんだからねっ!」

「かがみんつてなんだ」

「ノリ。まあそれはいいとして」

「いいのか」

いいんです。即興小話を作り終えて満足したので少し黙る。

さて、一体どういうことなのか。先ほど兵士さんから告げられた言葉の意味を考えてみる。

「また会える日を楽しみにしています」

何度も言うが、お姫様と直接の面識はない。情報収集の時にこちらから一方的に調べさせてもらったぐらいだ。そしてお姫様（というより城の大半の人間）はあの魔女部屋に来ることは出来なかったし、實際来たことはない。なのに「また」とはなんぞ？

というか今更気づいた。そもそも、なんでお姫様はおれの存在を知ってるんだ？

「あつれ、なんでだろう。おれのこと知ってるのは、まあ後々現場検証とか、ことのあらまし聞いたのかもしれないけど、わざわざこんな風に処分下すのおかしいよね」

今更ながらに違和感が湧く。おれはまごうごとなく、言うまでもなく「道具」である。

なのにわざわざ人を、兵士さんを使って処分を告げた。道具に対して。

これは、おれがこうして思考する、自我を持っていることを知っていたということだ。そんな事件に関係ないこと、報告されるとは思わない。というか気づいたかすら怪しい。おれは、黙っていればただの（というとな変な感じだけど）魔法具なのだ。城でも言った通り最近はおのオバハンとしか喋ってなかったし、独り言の趣味はない。

「兵士さん、理由知ってるよね」

「なんで」

「さっき創作劇即切りしたじゃん」

兵士さん今しゃべってるの聞く限り正直者だし、知らなかったら知らないっていうよね？もしくはそうなのかって聞くか。そう告げると兵士さんは「しまった」というか、ばつの悪い雰囲気になった。

「前に、っていうかついさつき、おれが自由に動けないことを言うて疑問に思ったのって、もしかしてそれも含まれてた？」

お姫様と会えたんだから、自由に動けるだろうにって。

兵士さんはすでに沈黙していた。おれは肩（ないけど）をすくめる。なんというか、兵士さんいいやつだなあ。

「まあいいや。そういえばだいぶ時間経つけど、今ってどこらへん？」

荷馬車に載せられる前、それとなく城外追放（思えばこれもおかしい。道具を「追放」って）されたあとどうなるのか聞いたが、「着けばわかる」の一点張りで結局聞き出せてない。

「……着けばわかる」

「いや、そろそろ着くじゃん。もうそろそろ国のはじっこ辺りでしょ？」

「着かない。まだまだ先だ」

「いや、それじゃあ、」

はた、と言葉を止めた。

「……………え？」

思わず、見えもしないのに兵士さんを見つめる。

返ってきたのは沈黙だけだった。

沈黙とは、すなわち肯定である。

「え、まじで？」

拝啓、 かあさん。

おれ、 国外追放されました。

荷馬車に揺られて？（後書き）

（いや、これ、詐欺じゃね？）

魔法の鏡がさりげなく頭いい。

ちなみに妹に聞かれたんで書いておきますが、FAはファイナルアンサーの意です。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5097q/>

---

政権交代（？）に巻き込まれた魔法の鏡の話

2011年10月8日16時49分発行